

元高等学校校長

鶴田 伊三男

ISAO TSURUDA



1932年長崎県五島市生まれ。57年長崎大学学芸学部数学科卒業後、長崎県下の高等学校に勤務、校長職を経て退職。現在、長崎総合科学大学非常勤講師、長崎大学工学部リメディアル教育担当(数学)。



作曲者である山口健作氏の直筆の楽譜。

## 大学歌を歌おう

私はこの大学の学芸学部(教育学部の前身)の卒業生です。昭和三十二年(一九五七)の卒業ですから、あと二年で半世紀になります。

その卒業生が現在の学生と交わる中で考えたことを二つだけ話します。一つは、長崎大学歌、学生歌のこと、二つめは、ラテン語の「AB ALTO AD ALTUM」のことです。

私たちの学生時代には長崎大学の歌はなく、そのために寂しい思いをしたことが度々ありました。印象に残っているのが、

ファイアーストームのあとのことです。教養部の年中行事の一つは、秋に体育祭をやり、その夜、ファイアーストームをするものでした。その時、夜空に高く舞い上がる炎に負



写真上：大村にあった大学校舎の玄関前にて。  
写真下：青春真只中の鶴田氏(左)と学友。(昭和29年撮影)

けまいと私たちは残り火が小さくなるまで、狂おしいほどに歌い、踊り続けました。終わった時には、声はかれ体はくたくたに疲れていました。これが青春だと思

い心は充たされてきました。しかし、私たちが歌った歌の中には、我が大学の歌はなかった。そのことが悔しく寂しかった。

このような寂しい思いが結集して、大学の歌が作られることになり、昭和二十九年に赤石幸吉氏作詞、山口健作先生作曲の学芸学部歌ができあがりました。機会あるごとにその歌を歌い感動し、自分を鼓舞しました。

五十年経った今、その歌は歌われていませんが、その歌を歌うと私の心は学生時代に戻ります。

現在は、れつきとした大学歌と学生歌が作られています。学生は幸せです。しかし、この大学の歌を多くの学生は聞いたこともないというのです。宝にもなる歌を何故眠らせているのですか、と叫びたくなります。

長崎大学には、優れた管弦楽団、吹奏楽部とコーラス部があります。この素晴らしい演奏と美しいコーラスで大学の歌をCDにし、学生に贈ると、学生はすぐ覚え、いつでもどこでも歌えるようになります。その歌を集団で、あるいは友と

ある  
いは一人  
で歌うと、  
志気は高揚し、絆は深まり、生きる力が湧いてくると思っています。全学的な行事の時、生の演奏で学生が合唱する姿が見たい。

次の話は、ラテン語「AB ALTO AD ALTUM」です。このラテン語は大学の卒業記念にもらった文鎮に刻まれ、「高きより高きへ」と訳されています。

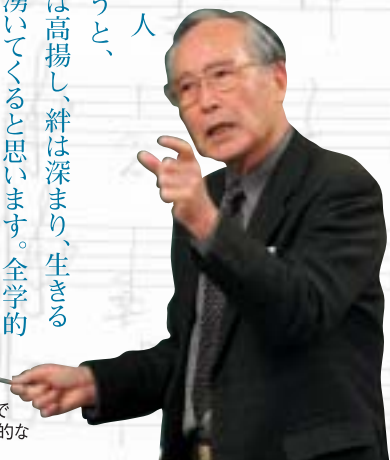
長崎大学の教育理念を最短な言葉で表現したものだと考えられるこの言葉に、卒業生はどれほど励まされているかわかりません。

この言葉に努力を促す崇高な愛を感じているからだと思います。しかし、現在この文鎮は卒業生全員には、贈られていないと聞き残念に思っています。

その文鎮を入学記念として贈れば、新入生は将来の夢に挑戦する大きな力にするだろうと思えます。



かつて卒業生全員に贈られていた文鎮。「AB ALTO AD ALTUM」(高きより高きへ)が刻まれている。



リメディアル教育(基礎教科の補習授業)で数学を担当。表情豊かで、動きのある情熱的な講義に学生もひきこまれていく。